

アジアと日本の農山村問題を相互啓発実践型地域研究で学ぶ

平成 27 年度 活動報告

安藤和雄 (東南アジア研究所)・岩田明久 (大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)・竹田晋也 (大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)・深町加津枝 (大学院地球環境学学堂)、坂本龍太 (白眉プロジェクト・東南アジア研究所) 矢嶋吉司 (東南アジア研究所)

はじめに：申請プログラム名とその目的

事業全体の構成：私たちは「アジアと日本の農山村問題を相互啓発実践型地域研究で学ぶ」という全体プログラムの傘下のもとに、個別プログラムとして（「まなびよし」の講義）として、以下の4つのプログラムを開講ないし準備中である。プログラム1 京滋の地域の人々の活動に学ぶ「京滋の在地に学ぶ実践型地域研究」（H26、H27 年開講 ポケットゼミ 前期月3、単位2、担当安藤和雄）、プログラム2 世界の農業の諸問題を地域との関連で学ぶ プログラム2 「自然と文化―農の営みを軸に



「あしなが育英会 京都インターンシッププログラム」で美山町の地元の高校生から英語で美山町の概要の説明をうける海外の学生たち

ー」（H26、H27 年開講 全学共通科目 前期水2、単位2 担当竹田晋也）、プログラム3 海外の農村にでかけて国際交流の中で京都の農村問題を考える「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」（H26、H27 年開講 国際交流科目 前期集中 単位2 安藤和雄・坂本龍太）を開講し、来年度にもこれらの3つの講義を開講し、加えて、プログラム4 京都の景観を実践活動から学ぶ「京都の自然と文化

的景観を活かす」(H27年開講 ポケットゼミ、後期木2、単位2。担当 深町加津枝)を本年度準備した。これらの講義を一つ一つのプログラムとした。

事業全体の目的と活動概要：京都府、滋賀県下の農村地域においても、農業離れ、過疎化、高齢化、耕作放棄地の増加、林地の放置などは進み、その影響により、地域に根ざし農村で育まれてきた生活文化や生活技術(伝統芸能、食文化、棚田などの農耕技術、林野利用技術、灌漑水利施設の維持技術)が消滅の危機に瀕している。他方、農村伝統文化を基軸とした地域再生活動が各地域から個別におきつつある。こうした動きに応じて、都市文化の模倣ではない、新たな発想に基づく「伝統文化に基づく地域再生活動」を実践・支援し、大学教育における人材育成を盛り込んだ再生モデルとして一般化し、他の地域にも応用できるような仕組みをつくるのが、地域に根ざした大学としての火急の課題であるとする。このことを実現していく上で、既存のポケットゼミや全学共通科目、国際交流科目を平成26年度として開講、平成27年度開講のために関連した地元の人々から学ぶための参加型農村調査、参加型ワークショップ、集落機能や農耕地の維持のためのボランティア実践活動のアクション・リサーチ、資料作成などをそれぞれ開講(開講予定)の講義別に行った。また特記すべきは「あしなが育英会 京都インターンシッププログラム」をCOC事業を南丹市美山町知井振興会との協力を受けて本事業で受け、欧米アジアの諸外国から70名余の学生と京都大学学生を10名余7月22日から23日に受け入れ、佐々里と北集落を中心にフィールドワークにより参加型農村調査とラップアップ会議をプログラム3との関係から実施した。

2. 平成26年度活動実績

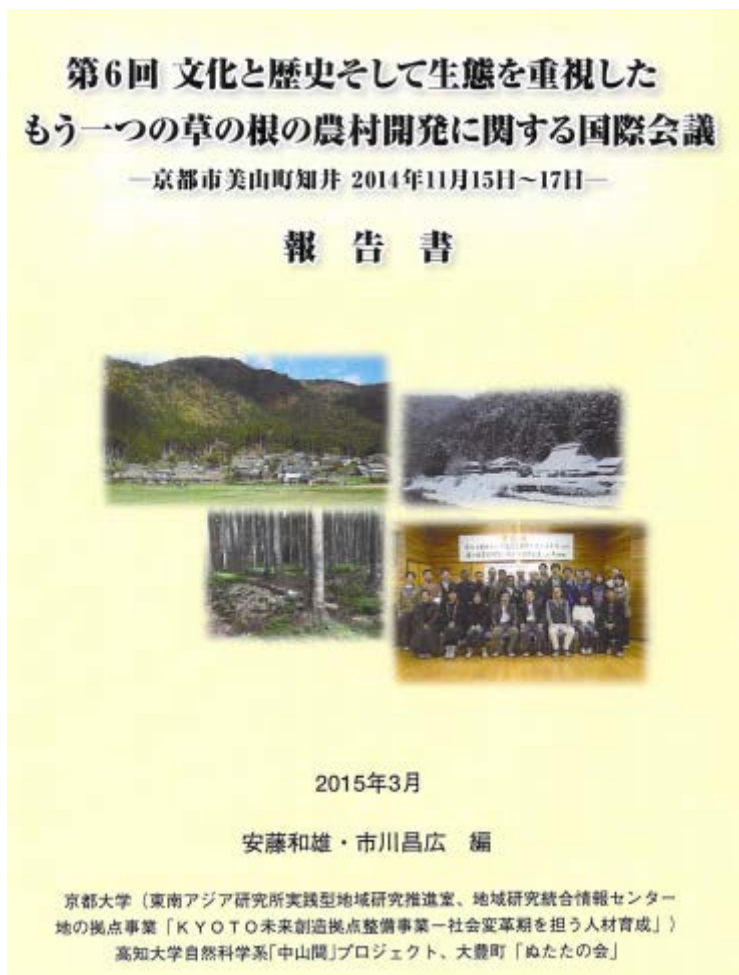
プログラム1 京滋の地域の人々の活動に学ぶ 「京滋の在地に学ぶ実践型地域研究」

本プログラムは、東南アジア研究所が地元と協働運営しえている亀岡、守山、朽木、南丹市美山町の農村部で、各NPO、自治会、集落住民との協働で運営しているフィールドステーション事業と科研プロジェクト萌芽研究「新しい在地の文化形成による現場型農村開発モデル研究」(安藤代表)などと協働実施した。教室型の講義、過疎、栽培放棄地の見学、国際会議の開催時の地元の人々の講師の招へい、プログラム全体を支える事務経費、事務消耗品などを負担し、以下を実施した。

- ① 教室型の講師招へいには、各フィールドステーションの関係者を招へいした。京都学園大学教員大西信弘さん、鈴木玲治さん、NPOの平和もやいネットのメンバー藤井美穂さん、南丹市美山町知井振興会事務局長河野賢司さん、滋賀県守山市美崎自治会会長伊藤潔さんの特別講義を実施した。
- ② 京都府の中山間村のもっとも大きな課題となっている集落維持、放棄地の維持と地元の人たちとの交流、地元の人たちからその経験を学ぶために、土、日を利用して講義受講学生らと美山町知井地区で過疎、放棄地を見学した。

③ 本事業ではプログラム3との関連で招へいするブータ王立大学シェラブッチェ校の講師や若手研究員らが佐々里滞在中に交流を行い、佐々里が抱えている過疎問題・離農問題を学んだ。

④ 国際会議開催 11月14日～17日にかけて第6回「文化と歴史そして生態を重視したもう一つの草の根の農村開発に関する国際会議」



「草の根の農村開発に関する国際会議」を知井振興会と共催した。本国際会議には高知県大豊町、山口県阿武町等で農山村に入って地域起し活動をアクション・リサーチとして実施している大学教員、大学学生、行政・NPO関係者、集落の人々、ミャンマー、ラオス、ブータン、バングラデシュ、インドの諸国から大学・NPO等の地域再生に関連する活動をすすめる関係者を招へいし国際会議、学生交流、参加型速成農村調査を実施した。

⑤月例研究会 毎月、東南アジア研究所において京滋フィールドステーション実践型地域研究会を講師を招き 17:30 以降の夕方に開催した。

⑥教材作成 上記国際会議報告書を他の事業との協力で出版製本した。

教材用としての利用のためにも作成した国際会議報告書

プログラム2 世界の農業の諸問題を地域との関連で学ぶ 「自然と文化—農の営みを軸に—」

京滋の農山村が抱える問題を学ぶためには国際的な視野にたつて世界の農林業に京滋の農業を位置づけることが必要である。また、農林業は、生物生産を通じた技術的体系あるいは経済的営為であるだけでなく、自然と深く関わってきた歴史の所産としての文化という側面をもち、その営みを通じて地域の環境形成やその維持にも大きな役割を果たしてきた。国内外での多様なフィールドワークにもとづいて、地域の環境や文化の形成・維持に果たしてきた農林業の役割を明らかにしつつ、「農」の営みをもつ現代的な意義と意味を竹田他7名がリレー講義によって世界各国のフィールド・ワークを報告した。そして講義の充実を図るために以下の活動を行った。

第4回大川フォーラム

大川活用プロジェクトの到達点と今後の展開



守山市美崎自治会館
平成 27 年 2 月 7 日 (土) 13:30~16:30
主催：大川活用プロジェクト
美崎自治会、守山市、立命館守山高専学校、京都大
学（生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所）

平成 26 年度 大川活用プロジェクト活動報告書

美崎自治会、守山市、立命館守山高専学校、
京都大学（生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所）、
京都大学 地の拠点事業（KYOTO 未来創造拠点整備事業-社会変革期を担う人材育成）

教材用としての利用のためにも作成した大川
活用プロジェクト活動報告書

① 国内農林業調査旅費講義内容の充実をはかるために日本国内の他地域の地域再生の事例（秋田県と京都府など）を情報収集するために、フィールドワークを行った。

② 上記プログラム 1、東南アジア研究所実践型地域研究推進室がかかわっていて、プログラム 1 の招へい講師をしていただいた滋賀県守山市美崎での大川活動プロジェクトの報告を本プログラム全体の教材として活用するために印刷製本した。プログラム 3 との関係から本プログラムにも関連する地域活動の事例となる報告書（大川活動プロジェクト）をプロジェクト全体の教材目的として利用するために編集、印刷製本した。

③ プログラム 1 の南丹市美山町知井地区で行った国際会議へのバングラデシュ、ミャンマーからの招へい費用や国内移動を他の科研事業などと協力して負担し、国際会議を実施し、地元民との交流を推進した。

プログラム 3 海外の農村にでかけて国際交流の中で京都の農村問題を考える「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」

本プログラムは京都大学国際交流事業、科研プロジェクト萌芽研究「新しい在地の文化形成による現場型農村開発モデル研究」（安藤代表）などと協働実施した。

① 国際交流科目の協力科目として、8 月 30 日から 9 月 13 日の間、10 名の京都大学学部生を伴って、ブータン王立大学シェラブッチェ校が受け皿となったフィールドワークを手段として、ブータンの過疎と農業問題について、日本の過疎と農業問題との比較学習のためのスタディツアーを行った。写真はシェラブッチェ校の学生たち 300 名ほどの前で日本文化の紹介をする受講学生たち。

- ② ブータン王立大学シェラブッチェ校から7月に約1ヶ月間、講師2名、若手研究員（学生でもある）2名（男女各1名ずつ）、11月に10日間、講師1名、2015年2月に2週間、講師2名、若手研究員（学生でもある）2名、科研とそれぞれの目的をよりよく効果的ならしめるために経費を分担負担して招へいた。



シェラブッチェ校の学生たちの前で講演する受講生たち



シェラブッチェ校の講師、若手研究者が日本の経験をブータンとの比較から発表したラップアップのための研究会

- ③ 欧米アジアの諸外国から 70 名余の学生と京都大学学生を 10 名余 7 月 22 日から 23 日に受け入れて、佐々里と北集落を中心にフィールドワークにより参加型農村調査とラップアップ会議を実施した。特に、ブータンからの学生、京都大学との学生と地元との交流を促進し、地元から学ばせることができた。
- ④ 11 月 15 日から 17 日に南丹市美山町知井振興会と共催し、他の事業と協力して第 6 回「文化と歴史そして生態を重視したもう一つの草の根の農村開発に関する国際会議」を開催した。そして、ブータンからの 1 名を招へいし、発表してもらうとともに参加型農村調査を実施した。
- ⑤ 2 月 7 日～21 日にかけてブータン王立大学シェラブッチェ校の講師、若手研究者からなる 4 名を他の事業との共同で招へいし、参加型農村調査と学生・村人との交流、雪下ろしボランティア実践を行いアクション・リサーチを実施した。
- ⑥ インターネットでの Web ホームページからの発信。「アジアと日本の農山村問題を相互啓発実践型地域研究で学ぶ」は東南アジア研究所実践型地域研究推進室がコーディネーターとなって実施している。東南アジア研究所実践型地域研究推進室の Web サイトの中で本事業の Web ページを設けている (https://pas.cseas.kyoto-u.ac.jp/activity/HP_chinokyoten/index.html)

プログラム 4 京都の景観を実践活動から学ぶ「京都の自然と文化的景観を活かす」

京都の自然や文化、歴史などの特性に応じた景観の保全、活用手法を実践を交えながら理解し、現代的意義について考える講義を来年度には開講する。そのための準備作業として下記の活動を本年度実施した。

① 丹後半島での参加型ワークショップ

丹後半島における地域資源利用と景観保全に関して、2015 年 3 月 5 日から 7 日に学生と地域で活動する NPO や集落で地域再生のための活動されている住民や指導員の方々が参加するワークショップと参加型農村調査を実施し、学生に丹後半島の地域から学ぶ機会を提供した。

- ② 本プログラムを充実させるためにフィールドワークを京都府下や比較のために他地域でも行なった。
- ③ これまでの学生らが参加して村人に学びながら得た資料整理を行った。

尚、本プログラムについては、平成 26 年度までは、「アジアと日本の農山村問題を相互啓発実践型地域研究で学ぶ」という全体事業の一つのプログラムとして実施されたが、平成 27 年度以降は担当の

深町さんが独立した一つの事業として実施されることになっている。



私たちは「アジアと日本の農山村問題を相互啓発実践型地域研究で学ぶ」という全体プログラムの傘下のもとに、個別プログラムとして（「まなびよし」と「いきよし」の講義として）、以下の4つのプログラムを実施または開講の準備をしています。

プログラム	タイトル・内容	開講年	科目	授業数	単位	担当者
1	京滋の地域の人々の活動に学ぶ 『京滋の在地に学ぶ実践型地域研究』 (まなびよし)	H27、H28	ポケットゼミ	前期 月3	2	安藤和雄 (CSEAS) 他
2	世界の農業の諸問題を地域との関連で学ぶ 『自然と文化—農の営みを軸に—』 (まなびよし)	H27、H28	全学共通科目	前期 水2	2	竹田晋也 (ASAFAS) 他
3	海外の農村にでかけて国際交流の中で京都の農村問題を考える 『ブータンの農村に学ぶ発展のあり方』 (まなびよし)	H27、H28	国際交流科目	前期 集中	2	安藤和雄 (CSEAS) 阪本麗太(CSEAS) 他
4	実践活動から学ぶ 『在地の参加型実践研究で学ぶ過疎・離農問題』 (いきよし)	H27	ポケットゼミ	前期 集中	2	安藤和雄 (CSEAS) 竹田晋也 (ASAFAS) 他

これらのプログラムを準備した目的は、京都府、滋賀県下の農村地域においても、農業離れ、過疎化、高齢化、耕作放棄地の増加、林地の放棄などの問題は深刻であり、その影響により、地域に根ざし農村で育まれてきた生活文化や生活技術（伝統芸能、食文化、棚田などの農耕技術、林野利用技術、灌漑水利施設の維持技術）が消滅の危機に瀕しています。一方でこうした問題を克服していかうという、農村伝統文化を基軸とした地域再生活動が各地域から個別に起きつつあります。また、過疎や離農の問題は、日本だけに特有なものではなく、アジア諸国、中でも国土の8割以上が森林地帯で山岳地形に富んだブータンでも注目され始めています。本プログラムでは、京滋の農山村の問題をアジア規模の視点から学ぶことも重視しており、国際都市京都に相応しい視点と確信しています。そして、京滋の農山村では都会の模倣ではない、「在地」に根差した発想で「伝統文化に基づく地域再生活動」が起きつつあります。この活動に学び、支援する実践そのものが大学における研究と教育活動となることが求められていると言えます。地域に学び、地域を支援する人材育成の一つのモデルとなることを目指して活動を行っています。こうしたモデルの実践的な確立は、地域に根ざした大学としての火急の課題であると考へ、既存のポケットゼミや全学共通科目、国際交流科目を平成25年度の「まなびよし」、「管轄大学校」の授業科目として開講しています。ここではこれまでの活動を周知していただくために、各プログラムの内容を報告します。

活動報告

- [プログラム 1](#)
[プログラム 2](#)
[プログラム 3](#)
[プログラム 4](#)



東南アジア研究所実践型地域研究推進室の HP 内に設けられた「アジアと日本の農山村問題を相互啓発実践型地域研究で学ぶ」の Web ページ (https://pas.cseas.kyoto-u.ac.jp/activity/HP_chinokyoten/index.html)